

THE ORIGIN

家庭画報が愛する
ブランドの真髄を旅する

時代に息吹を吹き込み、常に新しい美を提案してきた一流ブランドの情熱と美意識。その創造の歴史と寄り添うように、創刊以来、豊かさと美を追い求め続けてきた「家庭画報」も、今年で55周年を迎えます。いつの時代も、流行のみにとらわれず、女性の幸せを彩る装いを提案してきた私たちが、今あらためてブランドの真髄を探る「The Origin」の旅——。第2回は「サルヴァトーレ フェラガモ」、その靴作りの原点を訪ねます。

新しい靴に初めて足を入れる瞬間は、

まるで初恋の人に再び出会えたときのような

胸の高鳴りを女性に感じさせてくれます。

「この靴を履いて過ごす一日は、

きっとすばらしいに違いない」。

「サルヴァトーレ フェラガモ」は、

そんな魔法の靴をずっと作り続けてきました。

心を惹きつけてやまないデザインと、

どこまでも歩いていけそうな履き心地の1足は、

昨日までの風景を、少しだけ違って見せる、

不思議な力を持っているのです。

サルヴァトーレ フェラガモ

夢の靴を作るマシン

Walking
Dreams

SALVATORE
FERRAGAMO

撮影／武田正彦

現地コーディネーター／池田愛美 高橋 恵

参考文献／『夢の靴職人 フェラガモ自伝』(文藝春秋)



2.



3.



4.

Raffaella
Fanfani

1.ファンファーニさんのサルヴァトーレ フェラガモ・コレクション。「ある程度成熟した女性であれば何足でも持っていたい、そう思わせる力を持っています」。2.ファンファーニさんのお母さまが、孫のアリーチェさんに譲られたという、50年代のサルヴァトーレ フェラガモのオープントゥパンプス。3.2011年秋にオープンしたばかりのファンファーニさんのお店。4.アリーチェさんとともにお気に入りの靴を履いて。ファンファーニさんが履いているのは、今からちょうど20年前、ご自身の結婚記念日に買い求めたもの。

フ

エローニ宮殿のすぐ近くで、イタリアの伝統的なファブリックやその製品を扱う店「テラリンテア」を経営するラファエツラ・ファンファーニさんは、フェラガモをこよなく愛する女性の一人。「私の祖母も母も、サルヴァトーレ フェラガモの靴が大好きでした。祖母は、彼女たちに連れられて、子どもの頃から店に出入りしていたというファンファーニさんは、当時の様子をこう語ります。「店に行くと、まず足のサイズを測って木型を作ってくれます。クラシッくな

ラファエツラ・ファンファーニさん(ラティック経営)

祖母の代からずっと、サルヴァトーレ フェラガモのファン

内装の店内には多くの木型が並んでいました。中央のソファには靴を並べて試し履きをしている人たちがいて、まるで靴の聖堂のようでした。黒や茶などベージュ系の色が好きというファンファーニさん。「エレガントで履き心地がよくとても気に入っています。美しさと快適さが融合しているところが、やはりこの靴の一番の魅力ではないかしら。私は高いヒールが苦手なのですが、サルヴァトーレ フェラガモのヒールは不思議と疲れず、痛くありません。二〇年以上履き続けているものもいくつかありますが、大切に履けばそれだけ持ちます」。



1.



Giovanna
Ferragamo

義母からももらったジュエリーをあしらって、オリジナルのポンプスに

ジョヴァンナ・フェラガモさん(サルヴァトーレ・フェラガモSPA 副会長)

サ

ルヴァトーレ・フェラガモ氏の次女、ジョヴァンナ・フェラガモさんはブランドのレディスプレタポルテの立ち上げに尽力した人物として知られ、現在は会社の副会長を務めています。世界的な靴職人である父を幼い頃から見てきた彼女が、この日、お気に入りの靴として見せてくださったのは、サルヴァトーレ・フェラガモのポンプスの甲の部分に、彼女がご主人のお母さまから譲り受けたというダイヤモンドジュエリーをあしらったもの。「冬はこうしてスエードのポンプスに、夏場はシルバーのサンダルにつけ替えて一年

中使用しています。靴が古くなると新たに新調して、もう二〇年くらいかしら」。

その人生でただの一度も、サルヴァトーレ・フェラガモ以外の靴を履いたことがないというジョヴァンナさん。「足を入れればすぐに違いがわかってしまうからです。私は自分の木型というものを持っていませんが、それは、私たちの靴には豊富なサイズのバリエーションがあつて、オーダーメイドの役割を果たしているから。本当にいい靴は、履いているとき、まるで極上の手袋をはめているようなフィット感を足にもたらすのです」。



1.もともと義母さまの家に代々伝わるアンティークの靴についていたというダイヤモンドのジュエリー。2.家族の一員としてこのブランドで働くことはとても自然なことだったというジョヴァンナさん。父サルヴァトーレ氏が亡くなったとき、彼女はまだ17歳でしたが、その1年前すでにウェアコレクションを発表していました。3.最近のお気に入りには2011年秋冬コレクションのもの。ビーズの総刺繍が施された華やかな一足です。シンプルな装いやカジュアルなスタイルに、こうしたエレガントな靴を合わせるのがジョヴァンナさん流。

芸術品のようによく、 心地よく体を支えてくれる、魔法の靴 その秘密を探りに、フィレンツェへ

そ

の少年は、わずか九歳で妹のためにたったひとり靴を作

きました。この信じがたいエピソードを後に彼はこのように語っています。「靴の作り方は全部「思い出した」としか言いようがない。ただ座って考える、すると答えが記憶の中からわき出てくるのだ。私は前世で靴屋だったとしか考えられない」。――。

アメリカに渡り、ハリウッドスター御用達の靴屋として一躍脚光を浴びた彼でしたが、なおも「快適な靴」への探求は続きます。大学の夜間部で解剖学、とりわけ骨格について学び、大きな発見をします。それは、人間の体重はまず、土踏まず、にかかるということ。この部分をいかにささえるかということがよい靴のヒントであると気づいたのです。この完璧な靴の研究が成功して間もなく、彼はある思いを胸に、アメリカを去ります。「イタリアに戻って、もっと多くの人々のために手作りの靴を作ろう」、「機械ではできない、誰も作ったことのない靴を作ろう」――夢の靴職人「サルヴァトー



ジェームス・フェラガモさん
サルヴァトーレ・フェラガモ氏の長男、
フェルッチオさんの息子として生まれる。
フェラガモ一族の第3世代として、
メゾンをリードする存在。

ポンテ・ヴェッキオの夜景にきらめくのは、2012年の新作コレクション。右・チェーンのバイピングと、空洞のある特徴的なウェッジソールがエレガント。20万7900円(ヒール10^{1/2}) 左・鏡をモザイク状にしたヒールは、アーカイブシューズからインスパイアされたもの。32万5500円(ヒール8^{1/2}) /ともにサルヴァトーレ・フェラガモ(フェラガモ・ジャパン)

レ・フェラガモ」の誕生です。

一九六〇年、この偉大な靴職人がいなくなつたあとも、メゾンが一流の靴屋であり続けたのは、引き継いだ家族たちが、彼の靴の魅力をいちばん理解していたからではないでしょうか。「祖父が亡くなつた六〇年代は、職人中心の製造方法から、より多くの靴を生産できる体制に移行していく時期でしたが、それはあくまで祖父のやり方を可能なかぎり踏襲できる範囲で、というもの。彼が発明した土踏まずを支える鋼「シャンク」は今もわれわれの伝統手法です」というのは、サルヴァトーレ・フェラガモ氏の孫で、レディス・レザー製品部門のディレクターであるジェームス・フェラガモさん。

また、創業者は類い稀なセンスとアイディアの持ち主でもあつたというジェームスさん。当時黒一色だった靴の世界に、独特の赤やブルー、グリーンの色彩を持ち込み、ラファイア（椰子）やコルク、キヤンディの包み紙からセロファンまで、ありとあらゆる素材を試しました。「完璧なシューズとは、美しいだけでなく、履き心地がよく、飽きのこないもので。ですから私たちは、祖父がそうであつたように、クリエイティブな靴を作る、先駆者であり続けたいと思っていますのです」。



Walking
Dreams
SALVATORE
FERRAGAMO